

## 学問の土壌としての学際：粗雑な悪魔になるのを避ける方法

飯嶋，秀治  
九州大学大学院人間環境学研究院(共生社会システム論)

<https://doi.org/10.15017/1905830>

---

出版情報：教育基礎学研究. 8, pp.85-90, 2011-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 学問の土壌としての学際

— 粗雑な悪魔になるのを避ける方法

飯 嶋 秀 治

## 1. コメントの回り道

私自身の体験談から始めたい。一見するとそれは遠回りの道に見えるだろうが、学際  
の体験とはどういうものなのかを考えるのに、その方が具体的に理解できると思うから  
である。

## 2. 私の経緯

私は、もともと大学に進学する前の1989年、自由で開かれた経済人類学のための大学  
という私塾のようなところに通い、約1年半の間、週日の2時間ずつ、歴史学（世界史  
の教科書を書き換える）、経済学（『経済原論』を読み直す）、生命論（『生命を捉えなお  
す』を解説する）、精神医学（『故障した脳』を読む）、文学（自分で小説を書く）とい  
う毎日を送っていた。

その後、立教大学では人文地理学を専攻し、栃木県の儀礼で卒業論文をまとめた。九  
州大学に来たのは修士課程に進学してからで、比較宗教学を専攻した。主題は変わらず、  
栃木県の儀礼であったが、卒業論文の当時よりも、分析方法がしっかりと固まってから  
取り組めたのが大きな違いだった。そこからさらに博士課程に進学し、人間共生システ  
ムを専攻した時、オーストラリア先住民の研究に進んだ。

このように書くと、高校を卒業してからの15年ほど、最初から学際的であったし、そ  
の後もディシプリン（訓育）を移り歩いてきたようにも見える。実際、そうした自負も  
ある。しかし、今回ここで紹介したいのは、そんな私でも驚いた話である。

## 3. 驚き

大学院の修士課程の時、私は修士論文とは別に、実は週末の夜、博多駅周辺に出かけ  
ホームレスの人々と時間を共にしていたことがあった。もともとは研究のためではなかつ  
た。立教大学にいた頃から、なんというか「はぐれもの」が好きで、例えば立教大学の  
あった池袋では、年末から年始という、都会から人が最もいなくなる時に、池袋に徘徊  
しているのはどういう人たちなのだろう、と夜の街を徘徊していることもあった。そん  
な行動をしていた私にとって、ホームレスの人たちと環境を共有していると、ある種の  
安堵感があったのである。なんというか、そこは、生活が切実な人たちだけの場であっ

たからだろうと思う。

そうしているうちに私は、ホームレスのことに詳しくなっていき、「あれ？これって、研究になるぞ」と思って書きためたノートをまとめ、福岡のホームレス研究としては比較的早く発表をし始めた経緯がある。ところが驚いたのは、その同じ資料を、臨床心理学の研究会で発表した時の話である。

私のホームレス研究は、まず聞き書き資料に基づいて、ホームレスの人々の人づき合いの範囲が私たちが思っている以上に広いことを指摘し、次に、行動観察から、実はそのつきあいが特定のホームレス仲間に限られており、しかも、ごく短いことを指摘した。その上で、彼らが身近に配列しているさまざまなオブジェ（聖徳太子の像、般若の面、人形、猫など）の意味を解釈するという形で、民俗学的な聞き書きと生態人類学的行動観察を折衷したような発表であった [cf 飯嶋2010a]。

同様の内容は、西日本宗教学会や生態人類学会でも発表しており、それぞれから、前者の方法論、後者の方法論に関して、事実確認の質問が来ており、納得のゆくものであった。ところが、臨床心理学の学生たちから来た質問は、例えば「ホームレスの人たちの中で話が分からないような、譫妄状態にあるような人はどのくらいいますか？」というもので、「あまり見かけないんですけど、まあまれに、例えば100人中数人といった割合で、独り言をぶつぶつ言って周囲が目に入っていない人はいますね」と応えると、「ああやっぱり譫妄が出ている感じがしますね。病気の人はお医者さんとかにかかれますか？」「いや、殆どかかれないと思います」といったやり取りが続いた。

民俗学や生態人類学では、彼らが一つの生き方をしているとみなして、その事実をもっと知ろうとするのだが、臨床心理学では、彼らの生活上の問題を見つけて、それをどのように支え得るのが探られるのである。これはそれまで私が体験していたのとは全く異なった方向からの質問だったので、驚きであった。

私としては、臨床心理学のようにとらえてしまうと、ホームレスの人々がその状況の中で発揮している主体的な側面を見損なってしまうのではないかという不安もあった。今から考えてみると、そういう不安は、一見、学際的にやってきたように見えながら、私の学問の渡り歩きが、主には社会科学を出ていなかったため、実は身につけてきたディシプリンが、事実の収集とその解釈という社会科学的なディシプリンを自明視していたことを意味していた。

逆から言えば、臨床心理学の学生達は、彼らで、彼らが身につけてきたディシプリンを自明視していたのであろう。彼らの領域では、カウンセリングに訪れる人たちは、誰かが問題を抱えていることが前提になっているので、その人たちをどう支えるのかというディシプリンの中で育ってきている。そこから見ると、ホームレスの色々な側面はあるだろうが、問題をいち早く見つけ、それをどのように接するのか見立て、それに従って関わってゆく訓練が身体に染みついているのであろう。

ここで確認しなくてはいけないのが、どうして私のホームレス研究が、臨床心理学の場で発表できたのかと言えば、九州大学大学院の人間環境学府人間共生システム専攻には、「共生社会システム論」と「心理臨床学」とが隣り合っており、私は修士の頃から田嶋誠一先生、北山修先生、野島一彦先生、針塚進先生らを知っており、その一部で発表する機会を持てたからである。もしこうした機会が持てなかったならば、私は自らの社会科学のディシプリンをずっと自明視していったことだろう。ところが、比較的早く、この大きな溝に気づくことができたのは、この体験からだ。

#### 4. 粗雑化

このことは一見小さな話ではあるが、実は大きな教えをはらんでいるように思う。というのも、それぞれの学問は、私たちが生きているこの生活世界のある側面に、ある特定の焦点を当てることでその方向線上での思索を深めてきているのであり、それが各学問のディシプリンと言われるものになっているのだけれど、それぞれのディシプリンの中で数年を過ごすうちに、それが透明化してきて、その見方が自明視されてしまうからである [cf. ポラニー1980 (1966) : I]。

「されてしまう」と書くと、いかにも消極的な含みがあるが、その代価を払うことで、逆にそのディシプリンの上で議論が詳細になされ得るという側面がある。実際、一つの学問の中では、その学問の基本的なものの見方の上で、相互に論文を書き、議論を通じて語彙が詳細化するという経緯を経るかのようである [cf. 山口1975 : 第1、2章]。

普段そのようなことは意識しないが、もし学問の営みがそのような一側面を含むとするならば、その詳細化と表裏一体のようにして、私たちは他の基本的なものの見方の可能性を失っているのかもしれないということである。すなわち、あるディシプリン内で詳細化をする裏で、そのディシプリン外の可能性については認識が粗雑化してしまう。「粗雑化」といっても、それは「可能性」の問題なので、大抵は、そのディシプリン内が自らの「専門」となり、そのディシプリン以外は「常識」レベルにとどまるといったところであろう。

ところが、ここで先ほどの例をもう一度考えてみると、私が「驚き」「不安」を感じた中では、「専門」間同士での問題が生じつつあった。

社会科学では、生活世界から事実を学び取ることを「専門」としていたが、臨床心理学では、生活世界の問題を支えることを「専門」としており、それを前者から見ると、前節に書いたような「驚き」や「不安」になる。そして相手の「専門」を「訓練が身体に染みついている」と書いたのも、そうした視角からの表現である。

ところが、その時に忘れていたのは、「逆もまた真実」ということである。臨床心理学では、生活世界の問題を支えることを「専門」としていたが、社会科学では生活世界

から事実を学び取ることを「専門」としており、それを前者から見ると、やはり「驚き」と「不安」を感じ、そして当時の私の「専門」を「訓練が身体に染みついている」と感じ得たであろう。

実際、その学問的方法として、最低1年間はフィールドで参与観察することを「ディシプリン」とする文化人類学では、それまで、いかなる学問よりもそのフィールドを包括的に知っていると思いついてきたのだが、それがあつた種の「詩」的想像力と「政治」的選択をしていたことは、もう四半世紀前に指摘されたことである [クリフォード&マーカス1996 (1986)]。ところが当時の私はそれを知識としては知りながら、それが今自分の行っていることと結びつけることができず、臨床心理学的なものの方には「粗雑化」をしてしまい、下手をすれば「悪魔化」をしてしまう一歩手前であった。

## 5. 悪魔化

「悪魔化」などと言えば、やや大層に聞こえるかもしれないが、実際にこれは専門家同士の間でしばしば聞くことであり、専門家内部でも生じることである。それはある種の「比較の悪夢」に巻き込まれているのである。

私が「比較の悪夢」と呼んでいるのは次のような事態である。ひところ、「比較文化論」というものが流行し、例えば「日本人論」など、それ自体で一冊の本が書けるくらいの蓄積がある。しかしながら、これは要注意の領域である。というのも、A文化がB文化と比べて「全体主義的」に見えたとしよう。B文化はその点で「個人主義的」に見える。そして、この種の比較から、ではなぜA文化は全体主義的な性質を持つにいたつたのか、と心理や歴史で説明しようとし始める議論が多かつたのだが、これはある種の虚構である。というのも、A文化をC文化と比較した時には、A文化が「個人主義的」で、C文化が「全体主義的」に見えることもあるだろう。今度はそうなると、ではなぜA文化は個人主義的な性質を持つにいたつたのか、と心理や歴史で説明することになろう。が、ここで肝心なのは、最初の問題設定にあつた、A文化の特徴と言うのが、AとB、もしくはAとCとを比較した時にしか見えてこないような特徴でしかない、ということである。それはもともと相対的で便宜的な表現であつたはずなのに、次の議論の段階では、実体的で必然的な前提になってしまうのである [cf. ポラニー1980 (1966) : I ; ベイトソン1990 (1972) : 118-171 ; 松田1989 ; 飯嶋2010b]。

専門家同士の間で、こうしたことがしばしばおこることがある。特に、論争状態に入つたときにこうなり易い。Aの視点からBを見て相対的・便宜的につけていた表現がいつの間にか実体化・必然化してしまい、BからもAをそのようにしてしまう。その結果、お互いが相手を勘ぐり始め「悪魔化」してしまうのである。

少し前まで「宗教・政治・野球のことは人前で話題にしない方がいい」と言われていたが、それはこれらの領域が相手の「悪魔化」をしやすい話題の領域だからである。既

に「悪魔化」という語彙を使っているので、宗教については説明はいるまい。政治では右翼と左翼などその典型であろう。野球では巨人ファンは、他球団ファンを嫌う。教育学でもこのことは良く見られるだろう。例えばそれは教育学者と学校廃止論者の間に生じるだろう。また、「フリースクール」の「フリー」という表現にせよ、相対的で便宜的なものでしかない。ところがそれが実体化・必然化してくると、相手が「悪魔」に、自分が「神」に思えて来たりする〔cf. レヴィ＝ストロース2000（1962）；サイード1993（1978）；野村1987、1989；飯嶋2007〕。もちろん、こうした比較の悪夢が「悪魔化」のみに向かうばかりではなく、美しき誤解として「天使化」にも向かって、よくあるのがA、B、Cの間でBがAを天使化して、Cを悪魔化するという進化論的序列化が起こったのは何も近代の脱亜入欧の時代のみならず現在でも生じているが、そこまで抽象化して議論をすると、本コメントの範囲を超えるので、立ち入らない。

確認すれば、当時社会科学を自明視していた私が感じた「驚き」や「不安」といった違和感は、そうしたところに行きかねない芽を孕んでいたということである。

## 6. 脱悪魔化

けれども考えてみれば、私自身でも、生活の全てが主体的に営んでいるわけではなく、病気になることやどうしたらいいのか分からなくなることもある。同様に、ホームレスの人々が主体的に生きている側面があったからと言って、そこに彼らの問題がないわけではあるまい。

そうした「常識」に立ち還ってみれば、社会科学のディシプリンでは事実の学びに「詳細化」しており、臨床心理学のディシプリンでは問題の支援に「詳細化」していて、それぞれが生活世界の関心を共有しやすいディシプリンの共同体の文脈を自明化して、相手のディシプリンにまでその判断を下す過度の般化をしていたことに気付くであろう。実際、これは現在でも、私以外でもよく行ってしまうことなのである。今回の多分野連携プログラムの学生同士のディスカッションの中にも、既にこの種のディシプリンの自明化と過度の般化の兆候が見られた。

ところで私は今年度、人間環境学コロキウムのリコーの顧問になったのだが、こうした学際や多分野連携の文脈で、教員が学生に向かって、この種のディシプリンの自明化と般化をやられたら、学生にとっては辛かろうなあ、と思うことがしばしばであった。九州大学大学院の人間環境学研究科に進学してから、私は博士課程中、建築学や臨床心理学にも行き来していたので、学生たちのそうした「悪魔化」を「脱悪魔化」する媒介になっていると信じたいが、それは学生が判断することである。

まして、こうした学内のプログラムを超えて、こうした「専門家」が、現場に出て自らのディシプリンを自明化・般化し、相対的・便宜的な表現を実体化・必然化して「悪魔化」をするようなことがあり得ることを想像するにぞっとする。

こうした意味で、今回の多分野連携プログラムは、学生たちにとっては、私が修士課程時代に一人でやってきた学際性を学ぶ場になったかと思うし、教員たちにとっては、将来人間環境学コロキウムやシリーズ人間環境学で、他分野を連携させる土壌耕作の場になったのではあるまいか。私自身の体験に即して書いたように、こうした機会は、人間環境学研究学府のような、そうした機会が支援されているところでなければなかなか気づきにくいことなのである。その意味で、今回の多分野連携プログラムの試みは、自らのディシプリンが暴走しないための「学問の土壌としての学際」を学ぶ場として評価できるであろう。

### 参考文献

- 飯嶋秀治 2007 「レヴィ=ストロース」、土井博文ほか編『はじめて学ぶ社会学』ミネルヴァ書房：142-149
- 飯嶋秀治 2010a 「Homeless at Home 都市の一つの人間環境学」、飯嶋秀治&柴田建共編『平成21年度人間環境学研究院萌芽的学際的研究助成報告書 「動的指導体制」に基づく学際ネットワーク創出の試み』：83-104
- 飯嶋秀治 2010b 「比較宗教学—三時点三角測量の試み」、『九州大学大学院人文学研究院創立85周年記念論文集』九州大学文学部：613-643
- クリフォード、ジェームス&ジョージ・マーカス編 1996 (1986) 『文化を書く』春日直樹ほか訳 紀伊國屋書店
- サイード、エドワード W. 1993 (1978) 『オリエンタリズム』今沢紀子訳 平凡社
- 野村昭 1987 『社会と文化の心理学』北大路書房
- 野村昭 1989 『俗信の社会心理』勁草書房
- ベイトソン、グレゴリー 1990 (1972) 『精神の生態学』佐藤良明訳 新思泉社
- ポラニー、マイケル 1980 (1966) 『暗黙知の次元』佐藤敬三訳 紀伊國屋書店
- 松田素二 1989 「必然から便宜へ」、鳥越皓之編『環境問題の社会理論』お茶の水書房：93-132
- 山口昌男 1975 『文化と両義性』岩波書店
- レヴィ=ストロース、クロード 2000 (1962) 『今日のトーテミズム』仲澤紀雄訳 みすず書房